

『蒙古襲来絵詞』について

萩原 義雄

はじめに

鎌倉時代に成立した『蒙古襲来絵詞』は、肥後國御家人である竹崎季長たけさきすえながが作成したもので、文永・弘安の役（元寇）の合戦での活躍が絵と詞書に克明に記録されています。

『蒙古襲来絵詞』の原本（宮内庁三の丸尚蔵館所蔵）は、元は熊本藩士である大矢野家が所蔵していました。一八世紀末にこの絵巻物が発見されると、大名や文人たちの間で関心を呼び、多くの模本が作成されました。『蒙古襲来絵詞』の模本は、現在のところ四〇種類ほどが知られており、そのなかで九州大学附属図書館所蔵の『蒙古襲来絵詞』（九大本）と埼玉県立博物館が所蔵する『蒙古襲来絵詞』〔模本〕は、公開型の資料となっています。前者は、江戸時代後期に肥後の阿蘇神社にあった模本をさらに写したもので、楽翁本（宮崎県立総合博物館所蔵）と同じ系統の模本です。楽翁本は、寛政年間（一七八九〜一八〇〇年）に松平定信が写させたものであることから、九大本はかなり早い時期の模本と云えます。こ

- 1 -

のため、原本では破損して読めない詞を判読できる部分もあり、学会でも著名な模本の一つです。

絵巻図絵と詞書きとの関係

まず、詞書きについて全文を翻刻し、主要な文字群を抜粋してみます。資料としては、上記の資料以外として、明治二四年六月山田安榮校訂『たけさき季長の繪詞』が知られる。

上巻

詞一（蒙古襲来）

おきおき乃のははままにくくんんひひややううそそのかかすすををししららすすう
ちちたたつつすすゑゑななかかゝゝ一一ももんんのの人人々々ああままたたああるるななかかに
（江田）ゑゑたたのの又又太太郎郎ひひてていいゑゑるるここにに申申ううけけ給給ははるる
によりりててかかふふととををききかかへへててここれれををししるるししににててあ
ひひたたかかひひににみみつつくくへへききよよししをを申申すすととこころろに
いいそそくくああかかささかかににちちんんををととるるににつつききてて一一ももんんのの人人々々
ああひひむむかかふふににたいたいししややううくくんんたたさいさいののせせううにに三三郎郎ささへへ
ももんんかかけけすすけけののたたのの三三郎郎二二郎郎すすけけししけけををももてて
（江田）ゑゑたたのの又又太太郎郎ひひてていいゑゑるるももととににけんけんさんさんににいいりり候候
しし時時一一ししよよににててかかせんせん候候へへききよよしし申申候候ききああかかささか
ははむむままののああしたしたちちわわろろくく候候ここれれににひひかかへへ候候ははゝゝささ
たためめててよよせせききたりり候候ははんんすすららんん一一ととううににかかけてて



- 2 -

をものいにいるへきよし申さるゝにつきてけん
しちのやくそく(約束)をたかへしとてをのをのひかへしあひた
たいし(大將)やうをあひまたはいくさをそかるへきほとに
一もんのなかにてす(手長)な(肥後)かひこの國のさきをかけ
候はんと申てうちいつ

詞二

日のたいし(大將)やうせう(少貳)に三郎□□□□

□□はま□たかきいさこの□□□□

にしりをかけてちんをかためられしところ□□□□

うちむかひしにおほたさゑもんおりられ候へと申□□□□

さきをかけ候はんためにあ□□□□

□□□し□□□□

ほ□□□□

わつかに五(騎)きこれをもて御まへのかせんかたき□

おとすへきふんに候はすすゝむてけん(見參)さんに入□□□□

□□□とこな□□□□

よし君のけん(見參)さん□□いれ候へく候□□□□

かけすけそんめいすへしとはあひそんし候は□

ともそんめいし候はゝけん□□□□

□□うけ給□りて□□□□

もておそれて入候へともりながら申候と申すに

かけすけたゝめされ候へとありしに一もんの□□□□

ともおほせにしたかてちむを□□□せめあか
□□□むかふと申をもては(首崎)こさきの
ちんをうちいては(博多)かたにはせむかふ

詞三 季長、馳せ向かう

はかたのちんをうちいて(肥後)ひこのくに□□□□

□□□ゑ□□□一はんとそんしす(住吉)みよしの(鳥居)とりゐの□□□□

すきこまつはらをうちとをりてあかさか(赤坂)には□□□□

かふところにあしけなるむまにむらさきさかおも

たかのよろひにけれないのほろかけたるむしや

そのせい百よきはかりとみへて(凶徒)けうとのちんを

□てやふりそくとをひおとしてくひ二たちとな

きなたのさきにつらぬきてさう(左右)にもたせてま□□□□

とゆゝしくみへしにたれにてわたらせ給候そすゝ

しくこそみえ候へと申に(肥後)ひこのくに(菊池)きくちの

二郎たけふさと申すものに候かくおほせられ候は

たれそととふをなしきうちたけさ(竹崎)きの五郎

ひやうへす(季長)ゑなかけ候御らん候へと申てはせむかふ

詞四 季長、蒙古軍と戦闘

たけふ(武房)さにけう(凶徒)とあかさか(赤坂)のちんをかけおとされ

てふたてになりておほせいはすそ(龜原)はらにむきてひく

こせいはへふ(別府)のつかはらへひくつかはらよりとり(鳥飼)かひのしほ

ひかたをおほ(大勢)せいになりあはむとひくをおか(追駈)くるにむま

ひかたには(千湯)せたはしてそのかたきをはすけうとはす(凶徒)そ
はら(原)にちんをとりていろいろのはたをたてならへて(乱)らん
しやうひまなくしてひしめきあふす(手長)な(長)かはせむ
かふを(藤原太)とけんたすけみつ(寶光)申す御かたはつ(珠方)き候らん
御まち候てせう人をたてゝ御かせん候へと申を

きうせん(弓箭)のみちさきをもてしやうとすたゝかけよと
てをめてかくけうとすそは(龜原)よりとり(鳥飼)かいかたの

しほ(塩俵)やのまつのもとにむけあはせてかせんす一はんに
はた(旗指)さしむまを(馬)いられてはねをとさるす(季長)なかいけ

三きいたてをひむまいられてはねしと(肥前)ころにひせん
のくにの御け人しろい(白石)しの六郎みちやす(通泰)こちん

より大せいにてかけしにもう(蒙古)このいくさひきしりそき
てすそは(龜原)らにあかるむまもいられずして(夷狄)みてきのなかに

かけいりみちやす(通泰)つゝかさりせはしぬへかりしみなり
おもいのほかに(筑後)そんめいしてたかひにせう人に立つ

ちくこのくにの御けにんみつ(筑後)ともの又二郎くひの
ほねを(筑後)ぬとをさるおなしくせう人にたつ

詞五 季長、鎌倉へ向かう

関東へ参せむとするにしゆゑの御房御とゝめ

ありしをのほる(こふしん)によて御不審をかふるを御とゝめ
あらむために一旦の仰にてそあらむすらんさため

て用途は給らむすらんとふかく身をたのみて同

六月三日うの時竹崎(たけさき)をたてのほるにいよいよ不審(ふしん)
ふかくなるにつきてうちのものとも一人もうちを
くりするものたにもなかりし程にふかく恨をなし
奉りて中間弥二郎又二郎二人はかりあひくして

のほる用途には馬くらをうりたりしはかり也
今度上聞に不達は出家してなかく立帰事

あるましと思ひしほとに熊野先達(たち)をか(法眼)
けうしむのもとに打寄(うちより)て御祈精候へしと申さむと

おもひしを見参せははなむけなともあらむすらん
これより御布施をまいらせてこそいのりにはなる

へきあひたわつかなる用途一結使者(し)をもてまいら
せてよくよく御きせい候へと申てうちとをりて関(せき)

につく時の守護三井新左衛門季成(鳥榎子)ほうし
をや(親)たりしにつきて見参せしに遊君(ゆうくん)ともを

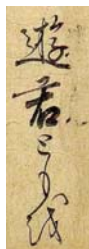
めしてなこりをおしみ海道にめされ候へとてかは
らけなるこまにようとうあひそへてはなむけに

せらる八月十日伊豆國三嶋大明神(みやうじん)にまいりてか
たのこく御布施(おふ)をまいらせ一心にゆみやの

いのりを申同十一日はこねの権現(ごんげん)にまいりて
御布施をまいらせて信心(しん)をいたしきせい申(祈誓)

詞六 鶴岡八幡宮に祈願

同十二日かまくらにつく三嶋(みしま)のしやうしむを



とおしてゆい(由比の底)のはまにてしほゆかきやとも
つかてすくに八幡(はん)にまいりて御布施(お布施)をまいらせ
て一心に弓箭(ゆき)のきせいを申す

詞七(安達泰盛に直談判)

かたかたふきやうにつきて申すといへともちう

けん一人はかりあひくしてわうしやくのあり

さまたるゆへにせひけん(見参)さん(見参)にいるゝふきやうなか

りしあひたしんめい(加護)のかこ(加護)ならずよりほかは申

たつへしともおほえさりし程に又八(八幡)はんにまいり

て一しんにきせい(折置)をいたしおなしき十月三日ときの

御をんふきやうあきた(秋田)のしやう(介)のすけ(殿)とのやすもり

の御まへにてていち(庭中)う申事

ひ(肥後)このくの御けにんたけさ(竹崎)きの五郎ひやうへす(季)な(長)か

申あげ候きよねん十月廿日もう(蒙古)こかせん(古)の時(宮崎)はこさき

のつにあひむかひ候しとこ(博多)ろ(博多)とはかたにせめ

いり候とうけ給はり候しをもてはかた(博多)にはせむかひ候

しに日のたいしやうたさい(大宰)のせう(小式)に三(左衛門)らうさ(左衛門)も(左衛門)ん

かけすけ(博多)はかたのおき(息の浜)のはまをあひかためて一とうに

かせん(古)候へしとしきりにあひふれられ候し(古)によて

す(季)な(長)かゝ一もんそのほかたいりやくちんをかため候な(古)か

をいて候てかけすけ(古)のまへ(古)にうちむかひてほんそにたつ

し候はぬあひたわかたうあひそひ候はすわつかに

五き候これをもて御まへのかせん(古)かたきをおとして

けん(見参)さん(見参)にいるへきふんに候はすすゝんでけさん(見参)にいるより

ほかはこするところなきものに候さきをかけ候よし

君のけん(見参)さん(見参)に御いれ候へきむね申候し(景資)にかけすけ(景資)も

そんめいすへしとはあひそんし候はねとももしそんめい

つかまつり候はゝけん(見参)さん(見参)にいれ申すへく候と候しをうけ

給てはかた(博多)のちんをうちいてとりか(鳥飼)ひ(鳥飼)のしほひかたに

はせむかひ候てさきをし候てかせん(古)をいたし(旗指)はたさし

のむ(馬)まおなしきのりむまをいころされす(季)な(長)か三井

の三郎わかたう一人三きいたてをかうふりひせん(肥前)のくの

御け人(白石)しろい(白石)しの六郎(通泰)み(通泰)ちや(通泰)す(通泰)せう人(通泰)にたて候てかけすけ(景資)

のひきつけに一はんにつき候し事御ち(注進)うしん(注進)にも

まかりいりかきくたしの状にもせられ候へきむね(経資)つねすけ(経資)

へ申候ところ(古)にさきの一たんはしさいを申あげ候て

おほせにしたかて申へく候と候てさしをかれ候て

君のけん(見参)さん(見参)にいらす候事(弓箭)きうせん(弓箭)のめん(面目)ほく(面目)をう

しなひ候と申にしやうのすけ(経資)とのつねすけ(注進)ち(注進)うしん(注進)

申てや候つらんいらすと(注進)は御ち(注進)うしん(注進)のふん御そんち候

かとおほせありし(注進)にいかてかそんちつかまつり候へきと申

に御そんち候とこそきこへ候へそんち候はてはふそくの

よしをはいかて御申候そとうけ給はる(経資)につねすけ(経資)申

候しことくはさきの一たんはしさいを申あげておほせ

にしたかてをて申へく候と候しうゑかきくたしは御ち
うしん進のふんをかきいたされ候とうけ給はり候をもて
さきの事御ちうしん注にあひもれ候とおほえ候と申時
かきくたしをとりて一けんありてふん分補とりうちし討死にの
候かと御たつねかうふるにうちし討死にふん分補とりは候はずと
申すに候はてはかせん手のちうをいたし候ぬてんきす
をかふらせ給候とみえ候うへはなんのふそくか候へきとおほせ
ありしにさきをし候て一はんにつき候しを御ちう注
しん進にいり候はてけん見さんにまかりいらす候ふんをこそ
申候へせんし候ところ御ふしんあひのこり候はゝかけ景
すけ資へ御けう御教書そをもて御たつねをかうふり候はんに申
あけ候さきの事きよたん虚誕のよしき起やうもん文にて
申され候はゝくん勲功こうをすてられ候てく首ひをめさ
るへく候と申すに御けう御教書その事はひかけ候はぬほと
に御申候ともなるましき事に候とおほせありしに
ひかけは候へしとおほえす候と申すにそんちせぬ事
こそ候へさやうに御そんち候うゑは御申あるへきに候
はずとうけ給はるにし所務相論よむ本そう本ろん本の事本にても候はん
てう朝のかせん合戦にても候はゝひかけうけ給はて申あくへく候
かい異国合戦こく合戦かせん合戦につき候てひかけ候へしとおほえす候ひかけ
候はぬ見によて御たつねをかうふらす候て君のけん参さん
にまかりいらす候はん事きうせん弓前のいさみなにをもてか

つかまつり候へきと申すにおほせはさる事にて候へ
とも御さた御沙汰の法のはうひかけ候はては御申候ともなるま
しき事に候とうけ給はるにかさねて申あけ候
事をそれいり候へともちきにくゑん勲しやう賞をかふり
候はんと申せうに候はすさきをし候し事御たつね
をかうふて虚誕きよたん虚誕を申あけ候はゝくん勲功こうをすて
られ候てく首ひをめさるへく候し美つしやう正に候はゝけん
さんにまかりいり候てかせん美のいさみをなし候はむ□
申あけ候てうさしをかれ候はむ事しやうせ□□□
なけきなに事かこれにすき候はんとさいさん申時
御かせん美の事うけ給はり候ぬけん見さん参にいれ申へく候
御くゑん勲しやう賞にをきてはさうい候はしとおほえ候ゑそき
くにへ下けかう向候てかさねてちうをいたされ候へしとおほ
せをかふるに君のけさんにまかりいり候はむにをき候て
はおほせにしたかてまかりくたるへく候ところ本訴にほんそに
たつし候はてむ無足そく無足のみに候ほとにさいしよいつくに候
へしとおほえす候てにつき候はゝかへりみ候はんと申
候したしきものともは候へともなましいにころはたをさゝ
むとつかまつり候によてふちするものも候はぬほとにいつ
くに候て二日の御大事をあひまつへしとおほえす
候と申すにさやうに候はんにはなんちの御事にこそ候
なれとあてやま山内殿のうち殿とのよりいそきまいるへきおほせ

に候御かせんの事はなをなをうけ給はるへく候とてきんせらる

詞八(季長、所領拝領)

同四日あまなはのたち(中野)にきんするにひせん(肥前)の

くにの御け人なかの(藤二郎)とう二郎こきりものにて

めしつかはれしかす多(季長)なかにたいめん(対面)してきのふ

御ていちう□けるかととふにかたかた御ふきやう(奉行)に

申候へともとり申されす候をもてちきに申

あけて候と申に御うち(中)のしかるへき人々あま

た候しなかにて御ていちう(中)のしたいおほせいた

され候てさきをし候し事三郎さゑもんにたつ

□□□んにきよたん(虚誕)を申あけはくん(勲功)こうを

すてられてくひ(首)をめさるへしと申すきい(奇異)のこ

はもの(者)のなとたまむら(玉村)におほせ候てこ日の御大事

にもかかけつとおほゆると御ものかたりの候し御めん

ほくのおほせに候程にいまたけん(見参)さんに入らす候

へともつくし(筑紫)の人はなつかしく思ひまいらせ候て申候

さためて御くゑん(勲)しやう(賞)は候ぬとおほえ候とつけ

しらせしをもてそれよりつねに申うけ給はり候

き同十一月一日八(八幡)はん(八幡)にまいりてひつしの時はかり

さんするにたまむら(玉村)のむまの太郎やすきよ(泰清)を

もてすゑ(季長)な(季長)か一人(内)うち(内)のけん(見参)さんと(所)ころにめされて

かみより御かせん(御領)のちう(御領)しやう(御領)に御りやう(御領)はい

りやう(御領)の御くたし(御領)ふみ(御領)まいらすへきおほせにて候これ

□□□とめされしにきん(御領)していまふ(御領)たま(御領)をきてつしん

てやす(泰清)きよ(泰清)にめ(泰清)をき(泰清)と見(泰清)あは(泰清)せて御(御領)くた(御領)し(御領)ふみ(御領)

を給(泰清)てすゑ(季長)な(季長)か(季長)にとらすへき(季長)よし(季長)するにやす(泰清)きよ(泰清)

ま(泰清)いる(泰清)をち(泰清)きにしん(泰清)すへき(泰清)おほ(泰清)せにて候(泰清)これ(泰清)へとか(泰清)さ

ね(泰清)てめ(泰清)され(泰清)しにまい(泰清)りて御(御領)くた(御領)し(御領)ふみ(御領)を給(泰清)はりて

つ(泰清)しん(泰清)て候(泰清)と(泰清)ころ(泰清)に(泰清)やか(泰清)て御(御領)くた(御領)り(御領)候(御領)か(御領)とお(御領)ほ(御領)をか

う(御領)ふる(御領)にく(御領)たる(御領)へき(御領)よし(御領)を申(御領)さ(御領)は(御領)くん(勲功)こう(勲功)を給(御領)は(御領)らん

た(御領)めに(御領)さ(御領)きの(御領)事(御領)は(御領)申(御領)け(御領)り(御領)とお(御領)ほ(御領)し(御領)め(御領)され(御領)ん(御領)すら

む(御領)と(御領)そん(御領)して(御領)申(御領)あ(御領)け(御領)候(御領)さ(御領)きの(御領)事(御領)君(御領)の(御領)けん

さん(御領)に(御領)ま(御領)かり(御領)入(御領)候(御領)てくゑん(勲)し(賞)やう(賞)にあ(御領)つ(御領)かり(御領)候(御領)は(御領)よ(御領)を

も(御領)て(御領)日(御領)につ(御領)き(御領)ま(御領)かり(御領)く(御領)たり(御領)候(御領)て(御領)御(御領)大(御領)事(御領)を(御領)あ(御領)ひ(御領)ま

つ(御領)へ(御領)く(御領)候(御領)そ(御領)の(御領)き(御領)な(御領)く(御領)候(御領)は(御領)かけ(景)す(景)け(景)へ(景)さ(景)きの(景)事(景)御

た(御領)つ(御領)ね(御領)を(御領)か(御領)う(御領)ふる(御領)へ(御領)き(御領)む(御領)ね(御領)申(御領)あく(御領)へ(御領)く(御領)候(御領)と(御領)申(御領)す(御領)に

ひ(御領)ろ(御領)う(御領)申(御領)候(御領)し(御領)に(御領)よ(御領)て(御領)御(御領)ふ(御領)ん(御領)の(御領)御(御領)く(御領)た(御領)し(御領)ふ(御領)み(御領)は(御領)ち(御領)き

に(御領)しん(御領)す(御領)へ(御領)き(御領)お(御領)ほ(御領)せ(御領)に(御領)候(御領)いま(御領)百(御領)二十(御領)よ(御領)人(御領)の(御領)くゑん(勲)し(賞)やう(賞)は(御領)さい(幸)

ふ(御領)にお(御領)ほ(御領)せ(御領)く(御領)た(御領)され(御領)候(御領)とお(御領)ほ(御領)せ(御領)を(御領)か(御領)う(御領)ふ(御領)り(御領)し(御領)に(御領)さ(御領)きの(御領)事

けん(見参)さん(見参)に(見参)ま(見参)かり(見参)入(見参)候(見参)は(見参)い(見参)そ(見参)き(下)け(下)か(下)う(下)つか(下)ま(下)つ(下)り(下)候(下)て(下)か(下)さ(下)ね(下)て

ち(見参)う(見参)を(見参)いた(見参)す(見参)へ(見参)く(見参)候(見参)と(見参)申(見参)時(見参)む(馬)ま(具)く(具)そ(具)く(具)しん(具)し(具)候(具)はん(具)事(具)いか(具)や(具)う(具)に

候(具)なん(具)と(具)お(具)ほ(具)せ(具)を(具)か(具)う(具)ふる(具)めん(具)ほ(具)く(具)きは(具)まり(具)なき(具)を(具)も(具)て(具)せ(具)ひ(具)を

申(具)に(具)を(具)よ(具)は(具)す(具)い(具)よ(具)い(具)よ(具)つ(具)しん(具)て(具)候(具)と(具)ころ(具)に(具)く(具)ろ(具)く(具)り(具)け(具)なる

む(小)ま(小)に(小)こ(小)も(小)ゑ(小)の(小)くら(小)お(小)きて(小)れ(小)ん(小)し(小)や(小)く(小)の(小)し(小)り(小)か(小)い(小)に

しんせいいくつはをはけてむまやのへつたうさえた

五郎をもてこれを給はる十一月一日ひつしの時はかりなり

詞九

かたかたふきやうにつきて申といえとも中間

一人はかりあひくしてわうしやくのありさまた

るゆへに是非けさんにいるふきやうなかりし

あひた神明の御加護ならすよりほかは申

たつすへしともおほえさりしほとに又

八幡にまいりて一心にきせいをいたし同十月三日

時の御恩ふきやう秋田のしやうのすけ殿

の御まへにてていちう申事

肥後國御家人たけさきの五郎ひやうゑ季長申

あけ候去年十月廿日もうこ合戦乃時はこさきの

つにあひむかひ候しとこに賊徒はかたに

□とうけ給はり候しをもてはかたにはせむかひ候し

に日の大將太宰の小貳三郎さゑもんかけすけはかたの

□□□はまをあひかため□□□□□□□□

*原本「合戦」の「合」初画のハネと「戦」の「戈」の縦棒が上の「合」の「口」のなかに

突き抜けている書法(土文字)に留意されたい。

下巻

詞十(石築地にて)

人々おほしといへともきくちの二郎(武房)

文永の合戦になをあけしをもてたけふ □□□

のかためし役所の石つい地のまへにうちむかて

將軍の兵船は本はしらを白くきにぬりて

しるく候とうけ給候をしむかてひとやい候て

君のけさむにまかり入候はむためにあひむ

かひ候御存命候半々御披露候へといひてうち

とをる

詞十一(季長、他人の舟で合戦に挑む)

同五日関東の御つかひかうたの五郎とをとしあむと

うの左衛門二郎しけつな拂曉にはせきたりしに季長

ゆきむかて海上をへたて候あひたふね候はて

御大事にもれ候ぬとおほえ候と申にかうたの

五郎兵船候はてはちからなき御事にこそ候へ

と申とこに肥前國の御家人其名わたるたかし

まのにしの浦よりわれのこり候ふねに賊徒あ

またこみのり候をはらひのけてしかるへき物

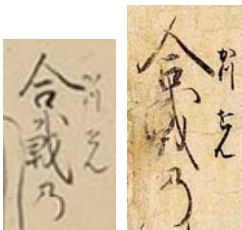
ともとおほえ候のせてはやにけかへり候と申

に季長おほせのことくはらひのけ候は歩兵と

おほえ候ふねにのせ候はよきものにてそ候らん

これを一人もうちとめたくこそ候へと申

にかうたの五郎異賊はやにけかへり候と申候



將軍の兵船

將軍の兵船

將軍の兵船

將軍の兵船

將軍の兵船

將軍の兵船

將軍の兵船

將軍の兵船

將軍の兵船

將軍の兵船

將軍の兵船

將軍の兵船

將軍の兵船

將軍の兵船

將軍の兵船

將軍の兵船

將軍の兵船

將軍の兵船

將軍の兵船

將軍の兵船

將軍の兵船

將軍の兵船

せいをさしむけたく候と小貳殿へ申へしとて
使者をつかはすに肥後國たくまの別当次郎

時（時秀）ひて大野小次郎（おののこしろう）にたかそのほか兵船（ひやうせん）まはし

たりし人々をひかゝるといへとも季長（すゑなが）か兵

船（せん）いまたまはらさりし程にせんはうをうしなひ

しどころに連銭（れんせん）の旗（はた）たてたる大船（たいせん）をしきたり

しを（合田）かうたの五郎城次郎殿（ごろうぢやうどの）の旗（はた）とおほゆるゆき

むかてみよとて使者をつかはすこのふねに

のりておきのふねにのらむとまへをたてつかひ

のふねにのらむとせしにのせさりしをもて守護（しゆこ）

の御（か）ての物に候御兵船（ひやうせん）まはり候はゝのりて合

戦（せん）すへしとおほせをかふりて候と申にのせ

られておきのふねにのりうつるにこたへ

の兵部房（ひやうぼう）めしの御ふねに候御ての人よりほか

はのすましく候おろしまいらせよと申てしもへ

をもてせきおろさむとするを

君の御大事（し）にたち候はむためにまかりのり

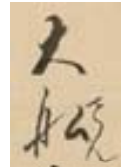
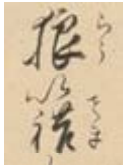
候をむなしくうみにせきいれられ候はむ事その

せむなく候はし船を給候ており候はむと申に

おるへきよしおほせらるゝうゑは狼籍（ろうせき）なせそ

と申に物とものきしひまにかのふねにのる

詞十二（兜を持たぬ季長）



して一所に合戦（かせん）候へしとおほせに候御ふねをよせ

られ候へと申にたかまさかふとをぬきかしこま

てをしよすといへともものるへきやうなかりし

をもて甚深（しんく）におほせつけらるへき事の候ちか

くふねをそへられ候へと申にたかまさちかく

をしよせてみて守護はめされけにも候はすふね

をのけよと申にちからなくておほせのことく

守護（しゆこ）は召され候はすこのふねを曾俱（そく）候によ

て申うけてのり候はむために申て候と申

につもり殿同船（どのどうせん）し候てところなく候ていよいよ

のけしあひたせむかたなくて手を擦りてしか

るへく候はゝ一身はかりのせられ候へと申に

戦場（せんぢやう）のみならては何事（なにじ）にかたかまさにあひ

てこんはう候へきめされ候へとてふねを

をしよせしにのりうつるをわかたうこれをみて

すてられしとなけきあへりといへとも季長（すゑなが）こんはう

してのるうへはわかたうをのするにをよはす弓（きう）

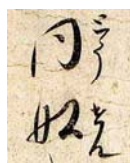
箭（せん）のみちすゝむをもてしやうとすよて手の物

一人もあひくせすた一人はかりあひむかふ

かふとはわかたうにしられしかためにもろさね

にもたせてほんふねにをきしほとにすねあて

をはすひてむすひあはせてかふとにせしとき



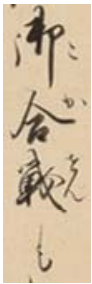
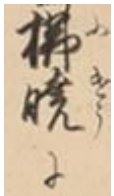
たかまさにいのちをおしめ候てし候とおほしめ
さるましく候敵船てきせんにのりうつり候までと存候ぞんしてし
候ふね近つき候へはくまでをかけていけとりに
し候とうけ給候いけとられ候て異國いこくへわたり候はむ
事しにて候はむには劣るへく候くまでに

かけられ候はくさすりのはつれをきりて給
候へと申にたかまさふかくつかまつりて候野中
殿とのはかりはのせたてまつるへく候つる物をと
申て身近くありし若党のきたりし

こさくらをきにかへしたるかふとをぬかせて
めされ候へとてえしを給候御事よろこひ入候へと
もかふとをきられ候はてうたれ給候なは季長
ゆへに候と妻子さいしのなけかれ候はむ事身のいた
みに候給ましく候と申をかさねてめされ候へ
とありしにちかことをたてゝ申時御せいし
やうのうへはぬしにきよとてとら数すいます
こしも身をかるくして賊船そくせんに乗り移らむ
ためにおひたりしそや(征箭)をときすてゝひたゝ

詞十三 季長、「大猛悪」と評される

あくる六日拂曉ふきやうにかうたの五郎(合田)のかり屋(仮屋形)かたにゆ
きむかて合戦かせんの事条々申におほせいせむ
にうけ給て候せむせむの御合戦みかせんも相遠さうい候はし



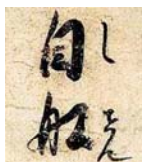
とおほ急候自船しせん候はて一度いちどならずかり事の
みおほせ候てふねふねにめされ候て
御大事しにあはせ給候御事は大まうあくの人に
候と上のけさむに入まいらせ候へく候式部房證しきふ ほうせう
人の事はうけ給候ぬ御尋候たつねは、申邊まへく候と
ありしにてよてかさねてせう人にこれをたつ

詞十四

陣じんにをしよて合戦かせんをいたしきすをかふりし
事ことひさなかのての物信濃國御家人しなのくにのこけにんありさかの
いや二郎よしなかひさなかのをいしきふの三郎

のての物いはや四郎しやうひさちかはたけやまのかくあみたふ
ほんたの四郎しやうさゑもんかねふさこれをせう人にたつ
頼承らいせうておひてのちゆみをすてなきなたを
とりておしよせよのりうつらむとはやりしか
ともこれも水手すいしゆろをすてをさゝりしほどに
ちからなくのりうつらさりし物なり同日むまの時

季長すゑなが、ならひにての物きすをかふるものともいき
のまつはらにて守護しゆごのけさむにいりて當國とうこく
一番いちばんにひきつけにつく鹿嶋しかのしまにさしつかはす
ての物同日巳剋みのくに合戦かせんをいたし親類野中しんるいのなか
太郎たろうなかす急郎きゅうしやう從藤源太とうげんたすけみついついたてをかふり
のりむま二疋にひきあころされし證人せうにんに豊後國御ふごのくにのこ



家人はしつめの兵衛次郎をたつ土佐房道戒(討死)ちしにの證人(せうにん)には盛宗の御(もりむね)ての人たまむらの三郎盛清(もりきよ)をたてけさむに入て同御ひきつけにつく

詞十五(子孫への忠節の指示)

□^へすもりの御事□□

□の人これをはんし申□□をよそ□□

つかる人百□□余人なりといへともちきに

御下文(くたしひ)を給はり御むまを給る事たゝ

季長一人はかりなり弓箭(きうせん)の面目(めんほく)をほと

□□事なに事かこれ□□

□□たをす□□はいかてかこの□□

にとゝむへきや向(まやう)後(ご)も又々□□

君(きみ)の御大事あらん時は最前(さいぜん)にさきをかく

へきなりこれをけふのことすへし

永仁元年二月九日

詞十六

一 關東へまいりし時御むさうのつけによて□□

年五月廿三日

□^(甲)左大明神(佐大明神)にはしめ□□

□□てしや□□にまい□□

□□での□□をこひ□□た□□

給てひかしのさくらのゑたに御みあてをかまれき
せ給し御事關東海東おなしもんしなりよて

海東を給はるへき□□四はらに□□

ひかしのさくらに御みあ□□

□のとくをひらくゆえに□□

海東に入部(へい)してきうせん(弓)のとくをほとこさせんた□□

にさくらには御みありけりとこれをしるそのゆえは

同十一月一日御(御)くたし(下)ふみ(文)を給はりてあくる正月四日

たけさき(竹)につく同□□海東に入部□かゝる□□

□とをかねて御しめし□□

□□に御みありけるをほ□ふこれ□□

てこにちにおもひあはするによて□□

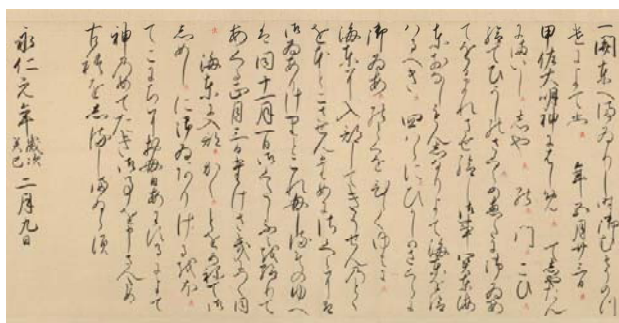
神のめてたき御事を申さんためにこれを

しるしまいらす

永仁元年 歳次癸巳 二月九日



※原本「まいる」を摸寫本は「まある」に改めている。



詞書きの言語解析のための資料

本書における国語学的研究としては、昭和五十年（一九七五）の参考資料06が知られます。本文翻刻資料と総索引を載せています。また、07の松本彩「蒙古襲来絵詞解説」末尾にも本文翻刻が収載されています。これらの翻刻状況は、いずれも虫喰い等で判読できないところを□で明示し、その本文内容を言及しようとする姿勢が見受けられます。特に田島毓堂さんは、その凡例に、「剥落破損等によつて不明の部分は□とし、わづかに判読しえたところは□内に文字を示す。」さらに、全く破損して字の存在しないところでも前後から明らかに推定できるところは□内（ ）に入れて示した。行数を行末に記したが、その行に一字も判明しない部分は行数に算入しない」という翻刻姿勢を示すものとなっています。

- 21 -

《参考資料》

- 01 『蒙古襲来絵詞と竹崎季長の研究』佐藤鉄太郎著 錦正社史学叢書
- 02 『北条時宗と蒙古襲来』村井章介
- 03 『莊園公領制の成立と内乱』工藤敬一 思文閣出版
- 04 『蒙古襲来絵詞』日本の絵巻 13 中央公論社
- 05 『情報化の時代と書籍・文庫』五味 文彦
- 06 『蒙古襲来絵詞詞書本文並びに総索引』田島毓堂編（東海学園国文叢

書）[B1 H613.1/77 禁帯出]

07 旧御物本『蒙古襲来絵詞』旧御物本四冊 [B1 折 721/136-41]

文字「船」の覚え書き

翻刻資料では、この文字「船」を悉く「船」の表記文字に置換して記載する傾向が見られます。ですが、「國」を「国」に改めるからには、基本的には、その凡例にはその旨を記載する必要があります。とりわけ、活字しか見ない研究者には、その多くの書記者の文字意識を見失うことに繋がってしまうことになってきます。

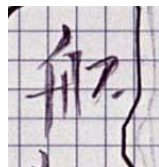
※「唐」故楊君墓誌



遺跡名 平城京左京三条二坊 二条大路

濠状遺構（南）「船越郷堅□「魚カ」

□「斤カ」



※李成市（早稲田大学）「東アジア辺境軍事施設の経営と統治体制―新羅城山山城木簡を中心に―」[二〇〇六年三月、春風社刊]に、「大村主船主人」記された木簡（国立昌原文化財研究所『城山山城』一九九九年）である。《中略》さらに、「船主人」も、六世紀以来の新羅の金石文に他出している「某（職責）十人」の形式で表記された職責名とみられる」とあるが、日本の「船」表記の文字とこの「船」表記の文字とがどう繋がっていくのかを考察する意味で留意しておきたい文字となります。



- 23 -

明治二十七年の『奥州仙台宮城郡燕沢村碑銘録起』によれば、弘安五年蒙古から来た禅僧が「都はるかに去りて、東奥片辺に石を建て、供養いたし、弔う」とあります。

『奥州名所図会』巻之二



『陸奥名碑略』藤塚東郷撰 曲溪画。塩釜・前田屋茂吉、文化十三年刊。一冊。モンゴル文字で書かれた碑文が、「奥州仙台宮城郡燕沢村之碑」として知られる碑文離合の文字の読み下し文は、「それをおもんみれば、人直は宜しく道に従ふべし、人正しきは益々教えをあぐる。ここに丘を刈りて 砥を断ちきり亡魂を弔ふ前に死せる人を元として後に命をおくとした人々を次にする。弘安五年九月、仲秋の二十日に蒙古軍弔の石碑を建てて亡魂を弔了」と石碑に刻んであります。宝歴八年（一七五八年）大場雄渌の『奥州名所図会』巻之二によれば、「燕沢村槇島にあり、比丘尼坂の下径を東へ十丁余行きて農家の後にあり」、また、「弘安の古碑は燕沢村、槇嶋観音堂の傍にあり」と書かれています。また、